



卓 話



「現代・短歌事情」

歌人

今野 寿美氏

俗な話題になりますが、ごく少数の歌人を除いて、短歌で暮らすことはできません。すなわち歌人はおおかた二足のわらじ、もしくは家庭の収入を伴侶に頼って、歌人としての収入はその活動に当てるといったちゃっかり型です。紙とペンがあれば短歌は残せるわけですが、歌人として仕事をこなすとなれば、資料・書籍代もかさみますし、取材に出かけ、集まりにも参加しなければならない。何より、歌集や歌書を刊行しますが、そう売れる例はなく、かなりの冊数を歌壇やメディアに贈呈しますから、本の刊行が収入になるところか、かなりの出費になるのです。それでも、自分の作品や追究した成果は残したい。けっして優雅なことはない事情なのです。



歌人の仕事といったら歌を詠むだけに限りません。自分でも満足ゆく作品をなすためにはそれなりの時間がかかりますが、雑誌からの依頼は作品掲載のほか作品評、歌集評、特集原稿となれば小さなエッセイから短歌論に近いものまで。短歌の世界では作者たちが同時に評者でもありますから、両方の立場を維持する必要があります。また、短歌・俳句に特有のスタイルですが、多くの投稿作品の選をするということも少なくありません。

各新聞、雑誌には短歌の欄があり、定期的選ばれた何首かが掲載されています。歌を詠む人口がこれだけ多いとなれば、日本はなんと文化度の高い国か、ということにもなりそうです。それだけたくさんの歌が日々、作者たちによって積み重ねられる。できあがりにも差が生ずる以上、掲載する作品の絞り込みが必要です。どの歌が掲載に値するかは、やはり目利きが見る必要があるということになります。そこで、選者の存在が求められるわけです。もともと選者というのは勅撰和歌集を編むために選ばれた歌人をさしていました。和歌もその名残です

が、数千、時には数万首の歌をあまり時間をかけずに読んで、優れた何首かに絞る仕事が、現代では歌人の大切な役回りになっております。今年の4月からNHK教育の短歌番組を担当しているのですが、月1回の30分番組に毎回1700首から2000首寄せられます。数日でその中から放送で採用する12首とテキストに佳作として採用する100首ほどを選びます。

選者の仕事は読むというより、見て即座に正確な判断をする必要がありますから、確かにワザというべきものかもしれません。ときには助詞のひとつでも直して、つまり添削をして採用する。どう添削するか力量が試されます。とはいえ、これはわたし個人の気持ちですが、歌という詩型が好きで始めたことですから、他者の作品を読むことは喜びで、読んだときに少し手を加えた方がいいと気づけば添削する。そういう作業はたいへん楽しいものなのです。そんな作業を仕事としていられるのは幸せなことと思っております。ただ、それも締め切りに追い立てられながらで、部屋の中には投稿のはがきやら一覧のダンボールがたえず積み重ねられて、やはり優雅なことなどありません。

私の場合は学生時代に短歌に関心を持つようになったのですが、一生短歌をつづけたいと思い、そのためには教員がよかろうと考えて都立高校で国語を受け持っておりました。10年過ぎたころ、カルチャーセンターの短歌講座を担当する機会に恵まれ、14年で退職して歌の仕事に専念するようになりました。そんな経緯はたいへん幸運だったと思います。連れ合いもやはり歌詠みで教員でしたので、理解してもらえたことが大きいと思いますが、多くの歌人は、ことに一家を養う立場にある場合は、なかなかそうはまいません。どんな職業であれ、勤務のかたわら歌を作り、文章を書き、人の歌にも関心を寄せつづけるというのは、よほどの意志がなければこなせないことです。それでもやはり創作の魅力なのか、立派にこなしていらっしゃいます。むしろ、職業人の貌が投影されて作品に陰翳が添えられ、社会の状況を垣間見せることにもなり、そこに家庭人としての表情や心理もまつわる。業界のことでもどんどん作品化すべきだとわたしは思います。

興味深い作品がたくさん生まれていますので、最

後に最近の歌集から、二人の証券マンの歌、出版社社長の歌を少しご紹介しておきましょう。

一番底、二番、三番 向かい行く十八年の生業あわれ
和嶋勝利『雑罌粟の気圏』
目守りいて仕掛けも遅き月曜を
〈なぎ〉と 呼ぶなり 〈ぼけ〉と呼ぶなり
現実を見ろと妻から諭されて
ゲンコツ見ろと子が繰り返す

大陸の風に胞子を飛ばさむとぶ厚き
株式発行目論見書を積む
本多 稜『游子』
お辞儀いややはり握手ととまどはれ
お辞儀して握手してまたお辞儀せり
かうすれば上達するといふ本を
まなこつぶりて幾冊つくる
本阿弥秀雄『しばらく』